

《翻訳》

センチメンタル ジャーニー (V)  
——フランスとイタリーを巡るヨーリック師の旅——

ローレンス スターン作

小林 亨訳

旅券

ヴェルサイユ

どうしてそんなに突然B…伯爵が部屋を出て行ったのかも、また、どうしてシェクスピアの作品をポケットに入れて行ったのかも、わたしには分らなかった——「自然に解けてくる謎はそれをあれこれ推測して時間を費やすこともない。」それで、シェクスピアを読む方が良いと思って「から騒ぎ」をとりあげると、わたしの心はたちまち坐っている椅子からシシリー島のメッシアナに飛んでしまい、ドンペドロやベネデックやビアトリスに夢中になり、ヴェルサイユや伯爵や旅券のことなど、すっかり忘れてしまった。

焦躁や悲嘆をそらしてその苦しみをとり去る空想というものに耽ることの出来る人の心には、新鮮な柔軟さがあるのだ！この空想の国にわたしが足を踏み入れなかったら、わたしはもうとっくに——とうの昔に——この世に別れを告げていたであろう。わたしの歩む道がわたしの足にはあまりに悪く、わたしの力にはあまりに峻しすぎる時には、わたしはその道をさけて、空想がその上に喜びのバラの蕾をまき散らした、なめらかなビロードの道に歩み入るのである。そうして、その道を何回か散歩してから力を回復して戻ってくるのだ——苦しみがわたしをひどく傷めつけ、この世にはそれから逃げる場所がない時には、わたしは新しい道筋を取る——つまりわたしはこの世を捨て——それから、天国よりももっと俗っぽい黄泉の国の方をはっきりと知っているので、イーニアス<sup>1)</sup>のようにその国につき進んで行く——わたしはイーニアスが自分の見捨て

たダイドーの哀しげな霊に出会い——それを確かめたいと願うのを見る——それからわたしはその傷けられた霊が頭を振って、自分の悲惨さと不名誉を作り出した人から黙って逃げるのを見る——そうするとわたしは彼女の哀しみで、わたしが学生の頃よくイーニ阿斯を読んで彼女のために悲嘆にくれたあの情感とで、自分の哀しみを忘れてしまうのである。

「確かに、これは空しい影の中を歩いているのではないし——また人はそれによって空しく心を苦しめることもない」——人は理性に、自分が動揺を覚える問題を托すことでもっと心を苦しめるのだ。——わたしは自分にはっきりと言い切れるのだが、心の中におこったある悪い感情を決定的に征服するには、それ自体の根拠地で戦うために、出来るだけ早く何か親切でおだやかな感情をかき集める以外に方法はないのである。

わたしが第三幕の終りまで読み進んだ時、B…伯爵が手にわたしの旅券を持って入って来た。C…侯爵様は政治家であると同時にすぐれた予言者らしいですね、と伯爵は言った。侯爵は『笑う人間は危険ではないだろう』と言ってましたよ。——もしこれが王の道化師以外の人のためだったら、この二時間では旅券は手に入らなかったでしょう——『失礼ですが伯爵様』とわたしは言った——わたしは王様の道化師ではないんです。——でもヨリックでしょうが？——それはそうです。——『それじゃ冗談を言ったのですね』——そうです、冗談を言いました、とわたしは答えた——でもお金はとりません——わたしはまるまる自分持ちですから。

イギリスの宮廷には道化師はおりません、伯爵様、とわたしは言った——最後にいましたのはチャールズ二世の放埒な御治世の時でした——それ以来、わが国の習慣はだんだんと洗練されて来ましたので、現在では愛国者が溢れてしましまして、彼らは祖国の名誉と富だけしかほしがりません——それにイギリスの女性達はみな貞淑で、純潔で、立派で、敬虔な人達ですから——道化師が笑いの種にするものは何もないんです——『これはまた手ひどい皮肉ですな！』と伯爵は大声で言った。

旅券

ヴェルサイユ

この旅券は、すべての副知事、知事、各都市の司政長官、軍司令官、司法官、それにすべての裁判官宛に、王の道化師ヨーリック氏及びその荷物をとどこおりなく通過させるようにというものだが——わたしが旅券を手に入れた威勢は、旅券の中で与えられた道化師という役割ですくなくそがれてしまった——しかしこの世には純粹のものというのではないもので、わが神学者の中で最も謹厳な人達には、楽しみは悲しみを伴うものであり——「彼らの知っている」最大の楽しみも「普通」は嗚咽程度に終ると極論している者もあるくらいだ。

わたしは謹厳にして博識のベヴオリスキウス<sup>2)</sup>のことを思い出す。彼は、アダム以来の人間の系図に註釈をつけていたが、註の半ばで自然の情から脱線し、窓際にとまっていた二羽の雀の話を世間に発表したのである。その雀は、執筆中いつも彼を悩まし、ついに系図の仕事から彼を脱線させてしまった。

——ベヴオリスキウスは書いている、これは奇妙なことだ！しかし事實は確実である。なんとなれば、予は好奇心を所有するが故に、一つ一つその愛撫をわがペンを以て書き留めておいたからである——ところで雄の雀は、予が註の残り半分を書き上げられるような短時間に、二十三回と半愛撫をくり返し、事実上予の執筆を妨害したのである。

ベヴオリスキウスはつけ加えて言っている、天なる神はその創造物になんと慈悲深きことか！

不運なヨーリックよ！お前の仲間の最も謹厳なる学者でさえ、お前が書齋で写しとる時でさえも顔を赤らめるようなことを、世間の前に書き記しているのだ。

ところで、この話はわたしの旅行とはなんの関わりもないことで——それですからわたしは重ねて——いく重にもお詫びいたします。

## 国民性

ヴェルサイユ

それでB…伯爵はわたしに旅券を手渡してから言った、フランス人をどう思っていますか？

わたしはもう親切のあかしを受けた後だから、この質問になにかうまい返事をするのに困らなかったものと、読者は御賢察下さるだろう。

——『まあそれはそれとして』——卒直に言って下さい、と伯爵は言った。世界中の人達が讃えているフランス人の持つあらゆる優雅さというものに、お気づきになりましたか？——それを明らかにするものをすっかり拝見いたしました、とわたしは言った——『本当に』と伯爵は言った。——『フランス人は優雅です。』——優雅すぎるくらいです、とわたしは答えた。

伯爵はこの「<sup>エノケス</sup>過ぎる」という言葉を気にして、言外の意味があるのではないかと主張した。わたしは出来るだけ長々と抗辯したが——彼はわたしがまだ腹をわっていない、だからもっと卒直に意見を述べるようにと言い張った。

伯爵様、わたしはこう信じています、わたしは言った。人間は楽器と同様に意識というものを持っております。そして社交上の要求やそのほか色々な要求が、それぞれ人の主調音といったものを必要とします。そこで、もし人が一段と高い音とか一段低い音とかで始めますと、調和音の形をくずさないようにするために、高音部か低音部に当然音が一つ欠けることとなります。——ところが、B…伯爵は音楽を解さないのになにか別の方法で説明するようにと希望された。それでわたしは言った。伯爵様、洗練された国民は誰にでも施しをしています。そしてさらに、優雅さそのものは美しい女性のようにたくさんの魅力を持っていますので、それには悪いことをする力もあるというのは気がとがめます。しかし全般的に見れば、人間が到達出来る完全さには或る限界があると信じます——ですからもし人が行き過ぎれば、別の特色を得るよりもむしろ特色をとり換えることとなります。この事実がいまわたくし達が問題にしております優雅さという点で、フランスの人達にどんなに影響を与えているかは敢えて申し上げかねます——しかし、仮にこれがイギリス人の場合だとして彼らが

洗練されていて、フランス人の特質となっているのと同じ優雅さに到達する  
としますと、私共は人を礼儀にかなった行為よりも慈愛のこもった行為をする  
ようにさせる『心の優雅さ』は失わないにしても——私共はすくなくとも国民  
性のはっきりした多様性と独創性を失ってしまうでしょう。この二つの特色は、  
イギリス人をお互いだけでなく、世界の他の国民から区別するものなのです。

わたしはポケットにガラス玉みたいになめらかになったウイリアム三世時代の  
のシリング銀貨を三、四枚持っていたが、わたしの仮説を説明するのに役立つ  
と思われたので、ここまで話を進めた時、それを手につかんで取り出した——  
わたしは立ち上ると、その銀貨を机の上に置いて言った——さあ、伯爵様、次  
々に人のポケットの中でちらちら七十年もこすれ合って、こういう銀貨は  
同じようになっていますから、どれがどれだかほとんど見分けが付きません。

イギリス人は、古いメダルのように別にしまっておかれて、殆んど人の手を  
渡り歩いておりませんので、自然の巧みな手が作った最初のごつごつさを保持  
しておりますから——さわってなめらかではありません——しかし、その代り  
に銘は非常にはっきりしていて、一目で誰の像、或いはどんな言葉が刻まれて  
いるかが分ります——そしてすでに述べた意見を柔らげようとしてわたしはつ  
け加えた。しかし伯爵様、フランス人は非常に多くの長所を持っていますから、  
こういう形の上の美点はない方がましでしょう——フランス人は、どの国民に  
劣らず忠節で勇ましく、寛大で機智に富み、善良な国民です——もし欠点があ  
るとすれば——あんまり「真面目」すぎるということです。

『これはどうも』と伯爵は大きな声で言うと、椅子から立ち上った。

『冗談でしょう』彼はその叫びを鎮めて言った——わたしは胸に手をあてて、  
大真面目でこれがわたしの決定的な意見であることを伯爵に断言した。

伯爵は、すぐC…公爵と食事をする約束があるので、残念ながらずっと在宅  
してわたしの意見を聞くことが出来ないと言った。

しかしヴェルサイユまで御足労願えたら、どうかフランスを離れる前にお食  
事にお立寄り下さい。そうしてあなたが御意見を撤回されるか——或いはどん  
な風に自説を辯護なさるか知りたいと思っています——伯爵は続けて言った。

しかし、イギリスのお方、もし自説を辯護なさるのなら全力をあげてやらなければいけませんよ。というのは、あなたには全世界が敵にまわっているんですからね。——わたしは伯爵に、イタリーへ発つ前にお食事に伺う榮に浴したいと約束した——それからおいとまをした。

## 誘惑

### パリ

宿に着いて馬車をおりると、門番が、いま紙箱を持った娘がわたしを訪ねて来たお知らせしてくれた。——帰ったかどうかは分りませんが、と門番は言った。わたしはその男から部屋の鍵を受けると二階にあがって行った。そうして、部屋の扉の前にある踊り場に十段足らずの所まで昇った時、その娘が静かに降りてくるのに出会った。

それはわたしが一緒にコンティ河岸を歩いたあの美しい「小間使い」であった。実はR…夫人がモデヌ旅館のすぐ近くの『婦人帽子店』になにかの用事で彼女を使いに出したのだが、わたしが夫人を訪問しなかったので、もうパリを発ってしまったかどうか、それでもし発っていれば夫人宛の手紙を置いていかなかったかどうか、ついでに調べてくるよう彼女に言いつけたのであった。

美しい小間使いは、わたしの部屋の入口近くにいたので、また戻って、わたしが短かい手紙を書く間しばらく待つようにわたしと一緒に部屋に入った。

五月の末の晴れた静かな晩で——緋色のカーテン（それはベッドのカーテンと同じ色だった）は閉じられていたが——太陽は沈もうとしていて、カーテンを通して暖かな光を美しい小間使いの顔に映していた。——彼女が顔を赤らめているとわたしは思ったが——そう思うと、わたし自身も顔の赤らむのを覚えた——わたし達は二人きりであった。そして二人きりだと思つくと、初めの顔の赤らみが消えない間にまた顔が赤らむのであった。

楽しい思いのために半ば罪の意識を覚える恥らいというものがあるが、これは人そのものよりも、体内を流れる血液に罪がある——血液は心臓からどんどん送られて、道徳性がそれをあとから追って行くのだが——血液を呼び返そう

とするのでなくて、その楽しい感じを神経にとってより甘美なものにしようとするのであり——つまり道徳性も加担しているのである。——

しかしこれ以上描くことはやめよう——わたしは、これが前の晩に彼女にしてやった貞節についての訓話となにか調和しないものが自分の胸の中にあるのを初めて感じた——それで五分間ばかり便箋を探したが、一枚もないことが分っており——それからペンを取りあげ——またペンを机に置いた——わたしの手はふるえて——悪魔が身内にいるようであった。

悪魔はもし反抗すれば逃げて行く敵であることをよく知っていたが——しかしわたしはめったに反抗したりはしない。それは、打ち勝つことが出来るけれども、その斗いで自分も傷つくかも知れないからであって——そのために、わたしは安全を願って勝利をあきらめる。そして悪魔を退散させることを考えないで、いつも自分が退散するのである。

美しい小間使いは、わたしが便箋を探している机のそばに近寄ってきて——まずわたしが下に置いたペンを取りあげ、わたしのためにインクを持ちましようと言ってくれた。しかも彼女は非常に魅力的に言ったので、わたしはお願いしようかと思ったが——しかし、そうはしなかった——書くものがないんですよ、とわたしは言った——なんにでもかまいませんから一筆お書きになって、と彼女は言った。——

わたしはあやうくこう言いそうになった、そんなら、美しいお嬢さん！君の唇の上に書いてみたいね。——

そんなことをしたら身の破滅だぞ、と自分に言いきかせた——そこで、彼女の手を取ると戸口の方へ導き、わたしが前に言った教訓を忘れないように頼んだ——必ず忘れませんわ、と彼女は答えたが——その言葉をいく分力をこめて言うと、わたしの方に向き直り、両手を握りしめると、わたしの手にあずけた——そんな場合に彼女の手を握りしめないのは不可能なことだった——わたしは彼女の手を離したかった。それで、手を握っている間中、心の中ではこうしてはいけないと斗っていたのだが——それでもやはり、握ったままだった。——二分もすると、また心の斗いがすっかり繰り返されるのが分り——それで、

そのことを考えると、わたしの身体全体がふるえるのを覚えた。

寝台のすそは、わたし達が立っている所から一ヤード半もなかった——わたしはなおも彼女の手を握っていて——どうしてそうなったのか分らないが、彼女が求めてたわけでもなく——また彼女を引張ったわけでもなく——それに寝台のことなぞ考えもしなかったのに——それなのに、わたし達は寝台に腰をおろす羽目になってしまった。

そうすると、そのきれいな小間使いが言った、旦那様から頂いたクラウン銀貨を入れようと、今日小さなお財布を作りましたので、お見せしますわ。それから彼女はわたしによりそっている右ポケットに手を入れて、しばらく探っていたが——今度は左ポケットを探した——「なくしてしまったわ。」——その時ほど、落ち着いた気持で辛棒強く待っていたことはなかった——結局、財布は右ポケットにあった——彼女が取り出すと、それは緑色の平織絹で作ってあり、刺し縫いした白いしゅすの切れで裏打ちされ、丁度銀貨がぴったり入るくらいのおおきさのものであった——彼女はその財布をわたしに手渡したが——それは美しいものだった。それでわたしは彼女の膝の上に手の甲をのせたまま、十分ばかり財布を持っていて——時々表を見たり、裏を返して見たりしていた。

わたしの襟飾りのひだが、一針か二針ほころびていたのだが——その美しい小間使いは、別に一言も言わないで、彼女の可愛らしい針箱を取り出すと、小さな針に糸を通し、ほころびを縫ってくれた——これは、わたしの今日の栄光を危うくするおそれがあると思った。それで、彼女が黙って仕事をしながらわたしの頸のまわりで手を動かしている時、わたしの頭に飾ってあると空想していた勝利の栄冠も、あやうく落っこちそうに感じた。

宿へ歩いて来るうちに、彼女の靴の革ひもが解けてしまっていて、とめ金はずれそうになっていた——「ね」と言って彼女は足をあげてみせた——わたしはお返しにどうしてもとめ金を締めてやらないわけにはいかなかったので、革ひもをとめ金にはめて——締め終った時、両方とも大丈夫かどうか確かめようと、もう一方の足もそろえて持ち上げた——ところがあまり突然両足を持ち上げたので——必然的にその美しい小間使いをひっくり返すことになってしま

ったのである——そして、それから——

### 勝利

そうだ——そして、それから——汝、その土のように冷たい頭とぬるく冷えた感情とで情熱を説きふせたり、仮面でかくしたり出来る人々よ——人間が情熱を持ったのが、如何なる罪過になるのか？わたしに教えてくれ給え。また、人の心が情熱に駆られ行かう行動だけが、何故心の父なる神に対して責任があるのか？ わたしに教えてくれ給え。

もし自然が、愛情と情熱の糸をなにがしかそこに織り込んで親切な心を織り上げているのならば——愛情と情熱とを抜き取ってしまえば、織物全体がばらばらになってしまうではないか？——自然を司どる神よ、どうかわたしのために禁欲主義者を鞭打って下さい！とわたしは呟いた——貴方の御心がわたしの道徳性をお試しになるためなら、わたしを何処に置こうとも——わたしの危険が如何なるものであろうとも——わたしの立場がどうであらうとも——そこから湧き上り、人間としてわたしのものである心の衝動を、わたしに感じさせて下さい——そして、もしわたしが善人としてそういう感情を抑えるならば——その成行は貴方のお裁きにお任せいたします。何故なら、貴方が私共を御創造になったのであり——私共が貴方を創造したのでありませんから。

この訴えを終ると、わたしはそのきれいな小間使いの手を取って立たせ、彼女を部屋から送り出した——彼女は、わたしが扉に鍵をかけ、鍵をポケットに入れるまで、わたしの傍に立っていた——「そして、それから」——勝利はまったく決定的となったので——わたしはその時はじめて彼女の頬に唇をつけ、再び彼女の手を取ると、彼女を旅館の門まで送って行った。

### 不可思議

パリ

人情というものを解する人なら、わたしがすぐに部屋に引き返すことが出来なかったことを、お分りになるだろう——そういうことは、わたしの愛情を

呼びさました音楽が終ったところで、今度は三度低い音程で弾き始めることになる——そこでわたしは、小間使いの手を離して別れた時、そのまましばらく宿の門の所に立って、通りすぎる人達をいちいち眺め、色んな推察を下していたが、やがてわたしの注意は、どうやっても考えつかないような一つの物事に引きつけられた。

それは、哲学者風の、真面目で沈鬱な風貌をした背の高い人物で、宿の門の両側あたりを、六十歩ばかりゆっくりと行ったり来たりしていた——年の頃は五十二才ぐらいで——細い杖を小脇にかかえ——何年も着古したと思われる、くすんだ褐色の三つ揃いの服を着ていたが——それでも服は清潔で、その男には、簡素ながらどことなく「<sup>プロブレマ</sup>気品」が溢れていた。帽子を取って、自分の前を通る沢山の人達に近寄る様子から、彼が施しを受けていることが分った。それで、彼が今度はわたしの方に近寄って来た時にやろうと思って、ポケットから一スウか二スウ取り出したが——彼は何も言わないでわたしの横を通り過ぎ——しかも五歩と歩かないうちに小柄な婦人に物乞いをするのであった——この婦人とわたしの二人では、わたしの方がずっと恵んでやれそうだった——彼はその人をすませると、直ぐに同じ方向を歩いて来た別の婦人に帽子を脱いだ。すると、一人の老紳士がゆっくりと歩いて来て——その後から意気な若い男がやって来たのだが——彼はその二人ともやり過して何の物乞いもしなかった。わたしは、三十分も彼を観察しながら立っていたが、その間に彼は十回以上も行ったり来りして、終始一貫して同じ手口を続けているのが分った。

彼のやり方には、非常に奇妙なことが二つあってわたしの頭を悩ました、結局分らずじまいであった——一つは、彼がどうして女性に「だけ」話をするのか——それから一つは——彼がどんな話をするのか、それに、女性の心を和らげるが、男性には利き目がないことを彼が知っているうまい話し方というのは、一体どういうものなのか、この二点であった。

この謎をさらに複雑にする別の二つの事があったのだが——一つは、彼が女性という女性にみな耳元で話すことで、物乞いをするというより、秘密を打ち開ける様子で話すことであり——もう一つは、彼はいつも成功したことで、女

性の足をとめると、女性は必ず財布を取り出して直ぐに何がしかを彼に与えるのであった。

わたしは、この現象を説明する理論を思いつかなかった。

今晚これからの数刻を楽しめる一つの謎を見つけたので、わたしは二階の自分の部屋へと帰って行った。

## 良心の問題

### パリ

宿の主人がすぐにわたしの後からついて来て部屋に入ると、どこか別の旅館に移ってもらいたいと言うのであった——どうしてなんだい？とわたしは訊ねた——彼は答えて言った、お客様は今晚寢室に二時間以上も若い女性と一緒にこもっておりましたが、あれはこの宿の規則に反するのでして。——よく分った、それじゃわたし達は仲よくおさらばすることにしよう、とわたしは言った——ところであの娘は全然悪いことをしていないし——わたしも悪いことはしていないんだ——だから、君は元通りだよ——でもこれで私の店の信用は台なしなんです——『御覧なさい、お客様』と彼は言って、わたし達が腰を下ろしていた寝台のすその所を指さした——そこには証拠を示すようなものがいく分見えたことをわたしは認めるが、いちいち詳しいことを説明するのは自尊心が許さなかったので、今晚は静かに寝て明日朝食の時に宿の払いを済ますから、主人も安心して眠るようにとすすめた。

すると主人が言った、「旦那様」たとえ二十人の娘さんがお出でになってもかまわなかったんですが、実は——彼の言葉をさえぎってわたしは言った、そりゃわたしの計算より二十人多いよ——彼はそれにつけ加えて言った、もしこれが朝だったら、かまわなかったんですが——それじゃ、パリでは一日の時間の違いが罪悪の違いを作るというのかい？——スキャンダルでは違ってくるので御座います、と彼は言った——わたしも物事にけじめをつけるのは好きなので、その男にまったく腹を立てたと言うことは出来ない——私もお認めいたすのですが、と主人はまた言い始めた、パリにお出での外国人の方は、当然レースと

か絹の靴下とか、髪縁などの品をお買いになる機会が出てくるわけですからもし女性が紙箱を持って入って来るのはなんでもありません。——なる程そういうことか、とわたしは呟いた。あの子は箱を持って来たけど、わたしは中を見もしなかったよ——そうすると、お客様はなんにもお買いにならなかったの、と主人が訊ねた——全然なにも買わなかったよ、とわたしは答えた——こんなことを申し上げるわけは、お客様に「良心的な」<sup>アンコンシヤン</sup>商売をする者をおすすめ出来るからなんで御座います。——じゃ今夜はそういう女性に会わなくちゃならないね、とわたしは言った。——すると主人は一礼して降りて行った。

それじゃ「宿の主人」<sup>ヌートルドアル</sup>をとっちめてやろうか、とわたしは大声を出して言った——でもそれからどうする？——それからあいつが完全に下劣な男だということに分らしてやる——そうして、それから？——どうなるって！——世の人のためになるんだ、とわたしは危うく言おうとした——それは他にうまい答えが見つからなかったからで——わたしのもくろみは別段主義主張からでなく、腹立ちまぎれからであったので、それを実行に移す前に嫌気がさしてしまった。

ほんの数分たつと、売子の女がレースの箱を持ってやって来た——しかし、何も買わないぞとわたしは心に誓った。

その売子はわたしに持っているもの全部を見せたが——わたしは気むづかしい顔をしていた。彼女はそれに気付いた様子を見せないで、小さな店を抜け、次々にありったけのレースをわたしの前に並べ——辛棒強い愛想の良さで一枚一枚ひろげたりたたんだりした——お買いになっても——ならなくてもよろしゅう御座います——旦那様の言い値でなんでも売られせて頂きます——その哀れな女は、一文でももうけたい様子で、わたしの心を引こうと躍起になっていたが、それはわざとらしい態度でなく、むしろ単純で愛らしい態度に感じられた。

人間にはやすやすと欺される心が或る程度ないと、それはかえっていけないものだ——わたしの心は和んできて、第一の決意を捨てたのと同じように、静かに第二の決意も捨ててしまった——どうして一人の人間をほかの者の罪のために罰しなければならないのか？お前があゝの暴虐な宿の主人に仕えているのなら、それだけお前の得るパンは固いのだ。わたしは彼女の顔を見つめながら考

えた。

わたしは、たとえ財布に四枚の「ルイドール銀貨」しか持っていなかったとしても、まづその内の三枚を出して一組の髪縁を買うまでは、立ち上って彼女を部屋から送り出すことなぞはしなかったろう。

——宿の主人は彼女とその売上げを山分けするのだろうが——そんなことはかまわない——そうであったところで、非常に多くの哀れな人達がわたしより前に、自分で出来ないし思いもつかないような行動に金を払ったのと同じことを、わたしもやったにすぎないのである。

## 謎

### パリ

ラフルールが夕食の給任をするために二階に上ってくると、宿の主人がわたしにほかの宿へ移ってくれといった無礼を詫びていると語った。

安らかな夜の休息を大事にする人は、出来るだけ心に敵意を持って寝るようなことはしない——そこでわたしは、こちらも宿の主人を怒らせて申し訳なく思っていると伝えるようラフルールに頼んで——ラフルール、さっきの若い娘がわたしを訪ねて来ても、わたしはもう会わない、とよかったら主人に話してくれないか、とつけ加えて言った。

これは宿の主人に対するものでなく、わたし自身に対しての犠牲であって、あやうく虎口を脱してもうこれ以上危険をおかさずに、出来るものならパリに入った時持っていた清純な心をそのままに、パリを出て行きたいと決心したからであった。

『旦那様、それではあなたの御身分にふさわしくありません。』彼はそう言いながら床に頭がつかんばかりの丁寧なお辞儀をした——『それに旦那様』お気持ちが変わるかも知れませんし——もし（偶然）楽しみたくなれば——そんなことは楽しくないだろうね、彼をさえぎってわたしは言った。

「いやはやどうも！」とラフルールは言い——それからさがって行った。

一時間ばかりたつと、彼はわたしを床につかせるためにやって来たが、いつ

もよりお節介だった——彼はわたしに一言いって頼みたいことが口から出かかっているのだが、言い出せないでいるのだった。わたしはそれが何んであるか皆目分らなかったし、実際それをわざわざ知ろうともしなかったが、それは、さっき宿の戸口の前で男が施しを受けていたあの謎が、もっと興味深くわたしの念頭にあったからだった——その謎を解くことが出来るなら、あらゆるものを犠牲にしたらあろう。しかもそれは好奇心からでなく——というのは、好奇心は一般にみて非常に低い詮索の原理であるからで、二スウででもその満足を求めたくはなかった——しかし、あんなにも早く、あんなにも確実に、自分の近づく女性の心を柔らげる秘訣は、どうみても例の「賢者の石<sup>3)</sup>」にも匹敵する秘訣であると思えた。それでわたしは、東西両印度を所有していたなら、その秘法を会得するためには、どちらか一方を手放したであろう。

一晩中わたしは頭の中でこの謎をあれこれ考えてみたが、まったく徒労に終わった。そうして朝になって眼が覚めると、バビロンの王<sup>4)</sup>が夢に苦しんだように、わたしの心も自分の見た「夢」にさいなまれるのであった。そしてわたしは断言してはばからないが、この謎を解釈することは、カルディアの賢者<sup>5)</sup>のように聡明なパリのあらゆる賢者達をも悩ませたであろう。

ルディマンシュ  
日曜

パリ

日曜日であった。そしてラフルールが朝わたしにコーヒーと巻パンとバターを持って部屋にやって来た時、彼はあんまりしゃれた身ごしらえをしていたので、まるで見違えるほどであった。

わたしは、パリに着いたら銀ボタンと環のついた新しい帽子、それにルイドール金貨四枚の支度料を彼に与えることを、モントルイユで彼に約束していた。それで、この男はあたりまえのことながら、その金でこの変身ぶりをみせたのであった。

彼は明るくさえた緋色の立派な上着と同じ色のズボンを身に着けていた——そしてこいつは古着の割にちっとも見劣りしませんなどと言うので——わたし

はなんて余計なことを言う奴だと思った——その服はまったく新品同様だったので、出来ない相談と分っていたけれども、その品が「古着屋街」から出てきたのでなくて、わたしが彼に新品を買ってやったのだと思いこみたかったほどであった。

こういうおしゃれは、パリではちっとも心に負担のかからない粋なことなのである。

さらに彼は、ひどく派手に刺繡のしてあるきれいな青いしゅすのチョッキを買って着ていた——これは実際のところいささか着古してくたびれていたけれども、さっぱりと洗濯されており——金モールの飾りは磨いてあってどちらかと言うとかなり目立つものであったが——青い色はしつっこくなく、上着とズボンに非常に良く調和していた。それに加えて、彼は新しい鞆と絹の襟飾りとを無理して買っていたし、また「古着屋」にズボンの膝にはめる金色の靴下止めをまけさしていた。それから「うまく刺繡してある」モスリンの襞縁を自前の金四リーブルで買っていたし——その上五リーブルで白絹の靴下を買っていたが——しかし何よりも素晴らしいことは、一スウもとらないで、自然が彼にすっきりした容姿を与えていてくれたことである。

彼はこのようないでたちをして、さらに髪を最高のスタイルに整え、胸には美しい「花束」をつけて——つまり一言でいえば、彼のまわりにはお祭りの風情が見られて、それはすぐにわたしに今日は日曜であることを思い出させてくれた——そうして、この二点を総合すると、彼が昨晚わたしに何か頼みたそうにしていたことは、パリの人達がみな過すようにこの日曜日を過したいことだとわたしは悟った。わたしがこう推測すると同時に、ラフルールはまったく丁重に、しかしわたしが断わることはない信じきった顔付きで『彼女の機嫌をとるため』どうか一日休みを頂きたいと申し出た。

実は、これはわたしがR…夫人に「対して」わたし自身しようともくろんでいたことであって——この目的のために「貸馬車」をそのまま貸りきっていたのであった。だから、ラフルールのように着飾った従僕を馬車の後に立たしていたら、まんざら悪い気もしないだろう。それで、わたしはこの時ほど彼を必

要と思ったことはなかった。

けれども、こういう困惑した時には、我々はとやかく言うよりは「心で感じ」なければならないのである——つまり、男女の奉公人達は主人との契約によって自由とは別れるが、人間性とは別れていない。彼らは生きた人間であり、主人持ちの状態にあっても、主人と同様にささやかな見栄も希望も持っている——もちろん、彼らはある値段で自由を売り渡してしまったのだから——彼らの要求が常識をはずれていれば、わたしはそれを断わりたくなるのだが、しかし、彼らはわたしに使われる境遇にあるので、こっちに彼らをどうにでも出来る力があることを思うと、可愛想な気がしてそれも出来ないのである。

「さ／＼、僕は此処しもべにおりますの。」と言われれば——胸にぐっときてわたしは主人としての権力を失ってしまう——

——行ってもいいとも、ラフルール、とわたしは言った。

——ところでラフルール、パリへ来てまだちょっとしかたっていないのに、どんな彼女を見つけたんだい？とわたしは訊ねた。ラフルールは胸に手を当てると、B…伯爵様のところの「若い女の子なんです」と答えた——ラフルールは社交性に富んだ人間であって、実際に彼の主人と同様めったに機会はとり逃すことはなかったから——なんとかして、どうやってか——わたしが旅券に没頭していた時に、階段の踊り場でその娘に当りをつけてしまった。そうして、わたしが伯爵を味方にした時間をうまく活用して、ラフルールはその娘の心を射とめたのであった——そして、伯爵家の人達はその日パリにやって来るらしいので、彼は彼女とあと二、三人の伯爵家の召使達と「大通り」ブールヴァールで会う約束をとりつけたわけであった。

すくなくとも一週に一度、心配をすっかり捨てて、踊り唄い、ほかの国民ならすっかり参ってしまう悲しみの重荷を遊んで忘れてしまうなんて、なんてフランスの国民はしあわせな人達なんだろう！

断片

パリ

ラフルールはその日一日わたしが楽しめるようなものを残して行ったが、それは、わたしが予期した以上のものであり、彼にもわたしにも思いもよらなかったほどのものであった。

彼はすぐりの葉の上に型で押しした小さなバターの塊をのせて持って来たのだが、その朝は暖かったし、持ってくる道のりが長かったので、すぐりの葉と手の間に反古紙を一枚もらって敷いてきた——そして、その紙は皿の代りをしていたので、バターをそのままテーブルに置くようにと彼に言って、それからわたしは一日中宿にいることに決めたので、彼に「仕出屋」<sup>トレチヌール</sup>へ行って昼食を注文するように命じ、朝食は独りで食べるからもう出掛けていいよとラフルールに言った。

わたしはバターを食べ終ると、そのすぐりの葉を窓から投げ捨てて、反古紙もそうしようとした——しかし思いかえして一行読んでみたところ、つい二行、三行と引きつられて読み進み——それが思ったより価値のあるものだと分った。そこで、窓を閉めて窓の近くに椅子を持っていくと、腰を下ろしてその反古紙を読んだ。

それはラブレール<sup>7</sup>時代の古いフランス語で書いてあって、おそらくラブレール自身の書いたものかも知れないのだが——さらにそれはゴシック文字で書いてあり、湿気と長い才月によってかなりうすれ消えているので、それを判断するには大変な苦勞であった——それでその紙を投げ出してしまった——それからまたその紙片を取りあげ再び判読しようとしてみたが、気が疲れるばかりだった——それでその疲れをとろうと、こんどはエライザへ手紙を書いた——けれども矢張りその反古はわたしの心をとらえて、判読することの難かしさはいよいよ読みたいという欲望をあおり立てた。

昼食を食べ、それからバーガンディ葡萄酒を一本呑んで、わたしは気持をしゃんとさせてから、再び判読にとりかかり——むかし、グルーテン<sup>8</sup>やジャコブ・スポン<sup>9</sup>がくだらない文章を読もうとしたように、精魂かたむけて二、三時間考えてみると、内容が判ったように思えた。しかしそれを確かめる一番いい方法は、内容を英語に訳してみて、それがどんな風なものになるかをみるこ

とだと考えたので——それで暇のある人がやるように、ゆっくりと翻訳を進め、時たま一文章を訳すと——こんどは部屋の中を行ったり来たりし——それから外界はどんな具合かと窓の外を眺めたりした。そのために、仕事を終えた時には、時計は夜の九時を過ぎていた——それから訳文を読んでみたが、それは次の通りである。

## 断片

### パリ

——さて公証人の妻は、夫たる公証人とその点につき極めて熱烈に論争を展開した——ここにもう一人公証人がいて、この論争を書き止め証明してくれるといいんだが、とその公証人は羊皮紙のを投げ捨てて言った——

——そんならあんたはどうするって言うの？と妻はさっと立ち上って言ったが——この公証人の細君というのは、まるで炎の魂さながら激し易い性質だったので、公証人はおだやかな返事をして妻の嵐を避けるのが上策と考えた——それで、おれは寢床に入るよ、と答えた。——地獄へでも行っちまえばいいんだ、と細君は応じた。

ところで、パリの慣習通り家にはベツトは一つしかなく、ほかの二部屋は寝る設備がなかったので、たった今自分を地獄へ直逆かさまに落とそうとした女と同じ床に入る気はなし、そこで彼は、その晩は風が強かったので、帽子と杖と短かい外套とを持つと、不安な心をいだいて「<sup>ボンヌフ</sup>新橋」に向って歩いて行った。「新橋」を渡ったことのある人は誰でも、いままで作られたあらゆる橋の中で、この橋がこの水陸よりなる球体である地球の表面で、陸地と陸地とをつなぎ合わせている——最も高雅な——最も立派な——最も大きい——最も軽やかな——最も長い——最も幅広い橋であることを当然お認めになるであろう——

「このことからみると、この断片の筆者はフランス人ではないように思われる。」

神学者達やソルボンヌ大学の学者達が、この橋について挙げる最悪の欠点は、もしパリの中か廻りにほんのそよ風が吹いたにしても、パリの如何なる風の吹き通す場所よりもひどく「畜生め」と罵られることである——学識ある先生方、それは誠に当然のことでありまして、と言いますのは風は「水に注意」とも言わないでまともに吹き付けて来て、しかも全く突如として吹き付けるので、帽子を冠って橋を渡る小数の人達の中で、帽子の値段である二リーブル半を危険にさらさずに渡れる人物は、五十人に一人もいないのであります。

この哀れな公証人は、丁度橋の番小屋の傍を通ろうとした時、つい持っていた杖で小屋の側面を叩いてしまったが、こんどはその杖を振り上げると先端を番兵の帽子の環に引っかけてしまい——橋の欄干の尖頭を越えてその帽子をセーヌ河にさっとすっ飛ばしてしまった。

——「誰かの得にならない風なんて吹かないもんだ」とその帽子を受けとめた船頭が言った。

その番兵は血の気の多いガスコーニュ生まれの者だったので、すぐに顎鬚をひねると火縄銃をかまえた。

当時、火縄銃はマッチで火を点けて発射したのだが、橋のたもとにいた老婆がたまたま手にしていた紙提灯の火を吹き消され、その火を点けようと番兵のマッチを拝借してしまっていた——それでこの事が、ガスコーニュ生まれの番兵の血が静まって事態を彼に有利なものにする一瞬の猶予を与えたのである——「誰かの得にならない風は」と言うと、彼はやにわに公証人の海狸の帽子を引ったくり、船頭の言った格言で自分の引ったくり行為を正当化した。

哀れな公証人は、その橋を渡りドーフィース街を通過して、サンジェルマン地区へ入って行ったが、歩きながら次のように嘆いていた。

おれはなんてふしあわせな男なんだろう！と彼は呟いた。生まれてからこの方いつも運命の嵐にもてあそばれ——生まれつき何処へ行ってもわが身とわが職業は悪口の嵐に吹かれるように出来ているし——教会のいわば雷によって嵐のような女と無理矢理結婚させられ——家庭の風に吹かれて家を追い出され——法王様の家来で橋の番兵という無法風には帽子をふんだくられ——風の強

い夜にも、災難という潮の満ち引きのまにまに、帽子も冠らずにこんな所に立っているなんて——どこにわたしは頭を休める場所があるだろう？——なんてみじめな人間なんだろう！羅針盤にある三十二方位のどっちから吹く風が、お前に人並みの幸福を吹きつけてくれるんだろう！

このように嘆きながら、その公証人が暗い路を歩いて行くと、近くの公証人を呼んで来いと娘に言いつけている声が聞えた——彼は近くにいた訳だから、その場を利用して通りをその家の戸口へ歩いて行くと、古めかしい応接間を歩いて、とある大きな部屋へと案内されたが、その部屋には長い軍用の槍——胸当——錆びた古い劔、それに弾薬帯だけが、壁の四ヶ所に等間隔に掛けられてあった。

むかしは一かどの紳士であり、逆境が人間を卑しくしない限り、いまでも紳士である一人の老人が、手で頭を支えベッドに横たわっていた。細い蠟燭の点っている小さな机がベッドの近くにあって、机の傍には椅子があった——それで、公証人はその椅子に腰を下ろし、ポケットに持っていたインク壺と一、二枚の紙を取り出して自分の前に置き、それからペンをインクに浸して胸を机にもたせかけると、老紳士の遺言書を作る準備万端を整えた。

あゝ公証人さん！と老紳士はすこし身体を起こして言った。お金をかけて遺言書を作るようなものは何んにもわたしは持っていないんです。ただ、わたしの身の上話だけは世間に残さないでは安らかに死ねません。そしてこの話から得られる利益は、話を聞いてくれたお礼にあなたへ遺贈します——この話は誠に変った話ですので、全人類に読んで貰えるに違いありません——ですから、あなたは財産を作ることが出来るでしょう——そこで公証人はペンをインク壺につけた——わが人生の諸事を司どる神よ！老紳士は天に向かってじっと眼を上げ、両手を振りあげて言った——御手を以てわたしを見知らぬ迷路からこの荒廃の地に導き給いし神よ、老いさらばえ哀しみに胸もつぶれた男の衰えた記憶を助けて下さい——彼は両手を組み合わせて言った、また貴方様の永遠の真理の活力によって、この見知らぬ人が天上の書に記されている事だけを書き止めることができますようわたしの舌をお導き下さい、その天上の記録からわたし

は罪を得たり或いは免れたりするのですから！——そこで公証人は、蠟燭と眼の間にペン先を持ち上げた——

——公証人さん、これは人間の心に情なさけというものをわき立たせる話なんです、老紳士は言った——これは情深い人の心には痛みを与え、無情な人の心には憐れみの情を起させるでしょう——

——その公証人は書き始めたい熱望に燃えて、ペンを三度インク壺の中に入れた——その時、老紳士はさらに公証人の方へ身体を向け、次のように物語を語り始めた——

——それでラフルール、この反古の残りはどこにあるんだい？ラフルールが丁度その時部屋に入って来たので、わたしは彼に訊ねた。

### 断片と花束\*

パリ

ラフルールが机のそばに来たので、ききたいことを繰り返してはっきりさせると、彼は反古の残りが二枚あったが、「花束」の茎がばらばらにならないように、その紙でまわりを包んで「大通り」で「恋人」に贈ってしまったと答えた——それじゃラフルール、R…伯爵家のその娘さんの所へ行って「その反古を貰えるかどうかみて来てくれないか」とわたしは言った——大丈夫ですとも、とラフルールは答えて——飛び出して行った。

あっと思う間もなく、この精勤な男は息せき切って帰って来たが、ただその反古紙を取戻せなかったことからだけでなく、ひどく気落ちした表情をしていた——『いやまったく驚いたことに』ラフルールが彼女にさよならを言ってまだ二分とたたないうちに——彼の不実な恋人は、彼の贈った「愛ガージュムールのしるし」を伯爵の従僕の一人にやってしまい——その従僕は若いお針子に——それから彼女はヴァイオリン弾きに、花束の端をわたしの求める反古紙でくるんだまま呉れてしまったのであった——わたし達二人の不運は組合わさっていたので——わたしは溜息をつき——ラフルールはその溜息をわたしの耳にこだまさせた。

\* 原註 Nosegay (花束)

——なんて不実なんだろう！とラフルールは叫び——なんて不運なんだ！とわたしは叫んだ。——

——且那樣，もし彼女がその紙を失くしたのならわたしは悔しくなかったでしょうが，とラフルールは言った——わたしはあれを見つけていれば悔しいと思わなかっただろうよ，ラフルール，とわたしは答えた。

ところで，わたしがその反古紙を見つけたかどうかは，あとになって判明するでありますよ。

## 慈善行為

### パリ

うす暗い通りに入るのをためらったり怖れたりする人は，特別善良な人で多くの事に適しているかも知れないが，しかし立派な多感の旅行者にはなれそうもない。わたしはまっ昼間に，大きい広々とした通りで見られるような様々の物は，殆んど問題にしないのである——自然は恥かしがりで，人前で演じるのをいやがるものであるが，しかし，このようなうす暗い片隅では，フランス劇を十ぐらい混ぜ合わせた情感に匹敵するものを持つ，自然が演じる短かい芝居の一場面が時々見られるものである——しかもそういう情趣は「まったく」素晴らしいもので，小説や芝居の主人公に向くと同時に説教師にも向くので，わたしは特に晴れの儀式のある時には，いつもこういうものから説教を考え出している——そして，説教の題目としては「カパドキア」「ポント」「アジア」「フリギア」「パンフリア<sup>10</sup>」などが——聖書の中では特に良いものである。

オペラ・コミック座から狭い通りに入る長いうす暗い路があるが，これはオペラが終ってからひかえ目に「<sup>ファイナル</sup>辻馬車\*」を待つとか，静かに歩いて帰ろうとする小人数の人達が通るところである。この路の端，劇場の側に小さい蠟燭がともされるが，そのあかりは劇場の出口だけを照して，路を半分も行くともう届かなくなってしまうので——役に立っているというより飾りのためにあると言える。つまり最小の光度を持つ恒星のように見えて，それはげんに燃えてい

\*原註 Hackney-coach (辻馬車)

るのだが——わたしの知る限り殆んど世間の役に立っていない。

この路を通過して帰ろうとしていた時、劇場の出口から五、六歩の所に近づくと、わたしには二人の女性が腕を組んで壁によりかかり、「辻馬車」を待っているらしいのが見えた——二人は出口の傍にいたので、辻馬車に優先権があると思ったので、彼女達から一ヤードばかりの所へ静かに歩いて行って、馬車を待つ順をとったが——わたしは黒い服を着ていたので気づかれないようだった。

わたしに近い方の女性は、三十六才位になる背の高いやせぎすの人であったが、もう一方は同じ背恰好で四十才位の人だった。二人とも、どこにも人妻とか未亡人とかの様子もなく——優しい愛撫に汚されたこともなく、甘い恋のささやきに損われもしない貞淑純潔な姉妹のように見受けられた。それでわたしは出来れば二人を幸せにしてやりたいものだと願ったが——彼女達の幸福はその晩別の方面からやって来ることに運命づけられていたのである。

うまい言い廻しをして言葉の端に甘い抑揚をつけた低い声が聞えて、どうかお二人で十二スウ銀貨をお恵み下さいと言うのである。乞食が施しの額を自分で決めるのは変っているとわたしは思った——しかもその金額は、普通暗がり乞食の貰うものの十二倍もの高額である。その二人の女性も、わたし同様のことに驚いた様子であった——十二スウですって！と一人が言い、十二スウ銀貨ですって！ともう一人が言ったまま——返事もなかった。

あなた様のような御身分の高い方達には、とてももっと少いお金をお願いすることは出来ません、とその乞食は言って、地面に深々と頭を下げた。

とんでもない！——お金なんてありませんわ、と二人は言った。

乞食はちょっと黙っていたが、また哀願し始めた。

どうか若々しく美しい御婦人方、わたくしのお願いに耳をふさぐことをしないで下さい、と乞食は言った——ほんとに、あなた！わたし達は小銭を持ってないの、と若い方の女性が答えた——それでは、どうかそのまま大きいお金で、他人に施す喜びを大きくなさいますように！とその男は言うのであった——そうすると、姉の方がポケットに手を入れるのがわたしに見えた——一スウ持っているかも知れないわ、と彼女が言う——その乞食はこう言った、一スウです

って！十二スウ下さいまし。自然の女神はあなた方にお恵み深くあったのですから、この哀れな男にお恵みをかけて下さい。

持っていれば、おなたに心から恵んであげたいんだけど、と妹が言った。

お美しく情深いお嬢様！と乞食は姉の方に向かってささやきかけた——あなた様の輝く瞳をこの暗い路の中でも朝の陽光がかげほほど美しくしているものは、あなた様の心の美しさと情深さのほかに何があるでしょうか？それにサンテール侯爵様と弟御様が、丁度通りすがりにあなた様方のことをとっても賞讃しておられたのも、そういうお心掛けのためではないでしょうか？

二人の女性は非常に感動した様子であった。そして突然同時にポケットに手を入れると、それぞれ十二スウ銀貨を取り出した。

その女性達とその貧しい物乞いとの間の掛引きは、それで終結を告げたが——それから、このどっちが十二スウ銀貨を施すかという論点が残されたのである——そうしてこの論争にケリをつけるために、二人の女性はそれぞれ十二スウ銀貨を与え、その男は立ち去って行った。

## 謎の解決

パリ

わたしは小走りにその男の後をつけて行った。つまりこの男こそ、宿の玄関前で女性からうまく施しを受けてはわたしの頭を悩ましていた人物であった——そしてわたしはすぐに彼の秘訣、すくなくとも秘訣の基礎となるものを発見した——それはお世辞であった。

お世辞は甘いエキスとも言うべきものだ！人間の情をさわやかに元気づけるものなのだ！人間の心のあらゆる力も弱さも、みんなその強力な味方になってしまうのだ！お世辞はなんてうまく血液に混じって、最も通りにくく面倒な通路を抜けて血液を心臓に送り込む助けとなるものだろう！

この哀れな男は、時間の制限がなかったので、ここではたっぷりとお世辞を使ったのである。彼は街頭で処理しなければならない多くの急ぎの場合には、もっと簡略にする方法も心得ていたのは確かだが、彼がどうやってそれを直し

たり、甘くしたり、強めたり、質を高めたりするのか——わたしは色々詮索する気は毛頭ない——乞食が二枚の十二スウ銀貨を手に入れたというだけで充分であり——あとはお世辞ですっと大きなものを手に入れたことのある連中が、誰よりも一番うまく説明することが出来るのである。(続く)

### 註

- 1) イーニ阿斯 (又はアイネ阿斯) : ギリシア神話ではトロイの王子。ローマの詩人ヴァージルの長詩「イーニード」12巻にその生涯が語られている。トロイ落城の後漂泊の船旅に出て、カルタゴの女王ダイドーの恋を斥け、ダイドーは焼身自殺を遂げる。後イーニ阿斯は地獄に降って彼女の亡霊と会う。
- 2) ベヴオリキウス : 17世紀半のオランダの神学者。
- 3) 賢者の石 : 中世錬金術者が求めて得られなかった霊石で、卑金属を金銀に変える力があるといわれていた。
- 4) バビロンの王 : 旧約「ダニエル書」第二章。王ネブカドネザルが不思議な夢を見たが多くの賢者達も判断出来なかった。予言者ダニエルが遂にこの謎を解いた。
- 5) カルデアの賢者 : カルデア人は占い、占星術などに精通していたが、その賢者もバビロンの王の夢を解くことが出来なかった。
- 6) さ、さ僕は… : 旧約「サムエル記下」第9章6節にみえる言葉。
- 7) ラブレール : フランシス・ラブレール (?1495—1553) フランスの物語作者、医師。「パンクグリエル」「ガルガンチュア」などの有名な作品があり、Sterneはこの作家を畏敬傾倒し、特に *Tristram Shandy* にその影響が大きく現われている。
- 8) グルーテル : Jan. Grutère (1560—1627) 16世紀末から17世紀にかけて有名であったオランダの古典学者
- 9) ジャコブ・スポン : Jaques Spon (1647—1685) フランスの医師、考古学者。ギリシア記念碑類の最初の探索、研究者として著名。
- 10) カバドキア、ポント… : 新約「使徒列伝」第2章9～10節にみえる。